

# 大学体育における知識・能力の形成 (8)

— フットボールの文化論 —

則元志郎・中熊芳子\*<sup>1</sup>・西田明史\*<sup>2</sup>・村上清英\*<sup>3</sup>・柿原一貴\*<sup>4</sup>・唐杉 敬

## The Acquisition of Knowledge and Ability Through University Physical Education (8)

— Football Culture —

Shiro NORIMOTO, Yoshiko NAKAGUMA, Akihito NISHIDA, Kiyohide MURAKAMI,  
Kazutaka KAKIHARA and Takashi KARASUGI

(Received October 3, 2011)

### I. 目 的

2008年改訂学習指導要領(体育)の基本方針は, 学習内容を明確にして, それらをより確かに習得させることである(高橋, 2008)。換言すると小・中・高校における体育の教科内容の明確化・体系化が今後進められていくことになる。すでに低学力化が生じている大学体育においても教科内容の明確化・体系化を検討しなければならない。

中央教育審議会(2008)は「各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～」を提示し, 学士課程教育の構築を求めている。これを受けて各大学では, 卒業にあたってのディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)を具体化・明確化の検討が課せられ, 公開が求められている。大学体育においても学士課程教育における学士力に対応した検討が必要である。

筆者らは2009年より「大学体育における知識・能力の形成」をテーマに継続研究を行ってきた。まず, 実態調査を実施し, 大学入学時における保健体育教科の知識・実践力を分析した。実態調査から導出された大学体育の課題は補習教育の必要性および生涯スポーツ, 技術・戦術, 総合性, 体力などの教科内容検討の必要性であった。次に課題を基に教科内容を設定し, 実験的実践により習得可能性を追求した。同時に一般の大学を対象に大学体育受講後の学生に対して習得された知識・能力の調査も実施した。

この時点では, 大学体育を共通教養, 初年次教育, 補習教育といった観点から捉え, よりよい大学体育の内容と方法を構築することを目標としていた。しかし, 上記のような学士課程教育問題に関わらずに大学体育を検討することができなくなった。

そこで, 本研究から学士課程教育に対応した大学体育の検討も行っていくことにした。学士課程教育に対応した授業内容と方法の検討である。

体育・スポーツ科学の成果つまり専門分野の内容と教養教育を融合させた授業内容を設定し, 実験的授業を実施・検討するものである。実験的授業の具体的な中核的内容は「フットボールの文化論」「卓球の生理学」「バレーボールのバイオメカニクス」などである。

本研究の目的は, 「フットボールの文化論」を中核的内容として15回の実験的授業を実施し, 一般的な授業と比較・検証することを目的とする。

### II. 方法

#### 1. 対象

実験群	25名(熊本県K大学1年生)	回収率: 83.3%
統制群	218名(熊本・佐賀県下の5大学の1年生)	回収率: 89.7%

\*<sup>1</sup> 平成音楽大学 \*<sup>2</sup> 西九州大学 \*<sup>3</sup> 中九州短期大学 \*<sup>4</sup> 尚絅大学

## 2. 授業期間

授業期間は実践群、統制群ともに2011年4月から7月までの90分授業の15回である。

## 3. 授業実践概要

実験群の授業概要を表1に示している。授業内容は大きく「技術・戦術的内容」と「文化論的内容」で構成されている。

「技術・戦術的内容」は、前半7時間がサッカー（フットサル）、後半7時間がフラッグフットボールを教材として構成されている。

どちらの教材も3つの基本的防御法（プレス、マン、ゾーン）を学び、それらに対応した攻撃法を実践しながら考えていくといったものである。

サッカーに関しては足でのボール操作が難しく、かつ女子にとっては不慣れなこともあり、全時間にわたってボール操作練習を10分程度実施した。

また、同時に並行して演習形式で「文化論的内容」を学習していく。これらは、大まかに隔週にわたって同一授業場所で授業前半（約20分）にプロジェクターや資料等で各担当班がプレゼンテーションおよび質疑・応答、さらには教員による補足説明等が行われた。

統制群の学生には各大学の教員によって計画された15回（各90分）の授業が実施された。

表1 授業実践概要

		技術・戦術的内容	文化論的内容
1	4/13	ガイダンス	
2	4/20	①オリテイ（全体計画）調査（事前） ②サッカーボール操作《フラフト》③フラフトのルール説明とゲーム慣れ	フットボール（サッカー、ラグビー、アメリカンフットボール）全体の文化論
3	4/27	①サッカーボール操作 ②フラフトのプレ・ゲーム（5:5）	
4	5/11	①サッカーボール操作 ②3つの防御法1	【1】 フットボールの起源と精神 担当：教員
5	5/18	①サッカーボール操作② 3つの防御法2	
6	5/25	①サッカーボール操作 ②防御法の選択と攻撃（ブロックを中心に）	
7	6/01	①サッカーボール操作 ②戦術を活かしたリーグ戦	【2】 フットボールの伝播・普及過程 担当：4班
8	6/08	①サッカーボール操作 ②戦術・戦略発表会	
9	6/15	《サッカー（フットサル）》 ①サッカーボール操作 ②プレ・ゲーム	【3】 フットボールの戦術史・ルール史 担当：5班
10	6/22	①サッカーボール操作 ②3つの防御法	
11	6/29	①サッカーボール操作 ②防御法の選択と攻撃	【4】 フットボールの国際的競技会 担当：3班
12	7/06	①サッカーボール操作 ②戦術・戦略の構想	
13	7/13	①サッカーボール操作 ②戦術を活かしたリーグ戦（1）	【5】 フットボールのスポーツ人口（その他の代表的スポーツ含む） 担当：1班
14	7/20	①サッカーボール操作 ②戦術を活かしたリーグ戦（2）	
15	7/27	①戦術・戦略発表会 調査（事後）	【6】 文化的価値と教育的価値 担当：2班

## 4. 調査内容

## 1) 総合的授業評価

高橋ら(2003)により開発された診断的・総括的授業評価尺度を用いた。授業評価尺度は表2に示すとおり情意目標、運動目標、認識目標、社会的目標の4領域（20項目）で構成され、総合的にも授業を評価できるものである。

この授業評価は実験群、統制群のすべての学生に対して事前と事後に実施された。

## 2) スポーツ実践を支える構成要素に関わる知識・技能に関する調査

質問項目は表3に示すとおりスポーツを支える構成要素である技術・戦術、組織・運営、その他要素の3領域で構成された20項目である。技術・戦術領域の構成要素は基本技術の名称、攻防の展開の仕方、状況判断、連携した攻撃、および守備などである。組織・運営領域の構成要素は大会の企画・運営、ルールおよび審判法、ゲーム運営などである。その他領域の構成要素は体力向上法、技能の上達過程、歴史的変遷、心理的スキル、実践するための環境や条件整備などである。

この調査は実験群、統制群のすべての学生に対して事前と事後に実施された。

表2 授業評価における質問内容 高橋ら(2003)の授業評価尺度使用

1	私は、少し難しい運動でも練習により自信がある。
2	体育では、いろいろな運動が上手にできるようになる。
3	体育では、みんなが楽しく運動を行える。
4	体育でゲームを行うときは、ルールを守る。
5	体育で、「あっ、わかった!」「ああ、そうか」と思うことがある。
6	体育が始まる前は、いつも張り切っている。
7	体育では、自分の能力に合った運動ができる。
8	体育で身体が丈夫になる。
9	体育では、グループで立てた作戦がゲームで成功することがしばしばある。
10	体育では、グループで作戦を立ててゲームを行う。
11	体育でゲームや競争を行うとき、ずるいことや卑怯なことをして勝とうとは思わない。
12	体育をすると、機敏に動けるようになる。
13	体育では、どのようにすれば運動が上手にできるかを考えている。
14	体育は、友人と仲良くなるよい機会だと思う。
15	体育では、自分から進んで運動する。
16	体育では、精一杯運動することができる。
17	体育では、上手な人や強いチームを参考して、上手にできる方法を考えることがある。
18	私は、運動が上手にできるほうだと思う。
19	体育では、グループの約束ごとを守る。
20	体育では、ゲームの勝敗を素直に認めることができる。

※上記20問に対して各々「はい」「どちらともいえない」「いいえ」で回答

表3 スポーツ実践を支える構成要素に関わる調査内容

1	技術や攻防の展開など、種目の特性(特有の面白さ)について説明できる。
2	基本技術の名称や行い方について説明できる。
3	味方や相手の状況に応じて、基本技術をゲームの中で実践できる。
4	味方と連携した攻撃の行い方(戦術)について説明できる。
5	相手の守備や味方の動きに合わせた攻撃をゲームの中で実践できる。
6	味方と連携した守備の行い方(戦術)について説明できる。
7	相手の攻撃や味方の動きに合わせた守備をゲームの中で実践できる。
8	基本技術や戦術の上達に必要な練習計画を立案することができる。
9	基本技術や戦術の上達に向けた練習に確実に取り組むことができる。
10	ルールおよび審判法について説明できる。
11	ルールおよび審判法に従ったゲーム運営ができる。
12	用器具の使用法や管理法を説明できる。
13	用器具を適切に使用および管理することができる。
14	大会を企画したり、試合を運営したりする方法について説明できる。
15	大会を企画したり、試合を運営したりすることができる。
16	種目に必要な体力要素および体力の高め方について説明できる。
17	種目に関わる技能の上達課程について説明できる。
18	種目の大まかな歴史の変遷について説明できる。
19	種目の実践を通じて獲得できる心理的スキルについて説明できる。
20	種目を生涯にわたって実践するための環境や条件について説明できる。

※上記20問に対して各々「とてもよく身についている」「やや身についている」「あまり身についていない」「まったく身についていない」で回答

### 3) 技術・戦術に関わる技能調査

調査内容は、サッカーとフットボールにおける攻防の技術・戦術に関わる5項目(ボール操作、攻防のコンビネーション、攻防のフォーメーション)で構成されている。

この調査は実験群の学生のみが対象で、事前と事後に実施された。

### 4) 教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容に関わる調査

調査内容はフットボールの文化論に関わるもので近代スポーツの誕生過程、スポーツの伝播・普及過程、ルール変更と精神、戦術史とルール史、文化的価値と教育的価値の5項目で構成されている。

この調査は実験群の学生のみが対象で、事前と事後に実施された。

## III 結果

### 1. 総合的授業評価

#### 1) 授業評価(全体)における事前・事後の変化

授業評価(全体)の事前・事後比較を図1に、評価得点を表2に示している。質問項目の詳細は前出の表2に示している。評価尺度は情意目標、運動目標、認識目標、社会的目標の4領域であるが、その全体を合計し総合的に比較したものである。

実験群、統制群とも事前調査ではほぼ同様の合計得点を得ていた。このことから、実験群が特別な学生ではなく、一般的な学生(対象)であったことがわかる。

統制群は異なる大学および異なる教員による授業が行われた218名の学生の結果であり、ほぼ一般的な結果と考えることができる。

実験群、統制群ともに事前に比べてわずかではあるが伸びを示した。統計的には有意な差があった。

全体として実験群、統制群とも同様の結果および傾向を示した。

#### 2) 各領域別における事前・事後の変化

##### (1) 情意目標

情意目標の事前・事後比較を図2に示している。各項目においてプラス評価したもの(+)を上段(黒色)に示している。どちらとも判断できないもの(0)を中絶(灰色)に示している(以下、「0評価」と呼ぶ)。マイナス評価したもの(-)を下段(白色)に示している(以下、他の3つの目標も同様)。

実験群、統制群ともにプラス評価が増加し、0評価とマイナス評価が減少した。全体的に両群とも同様の傾向を示したといえる。

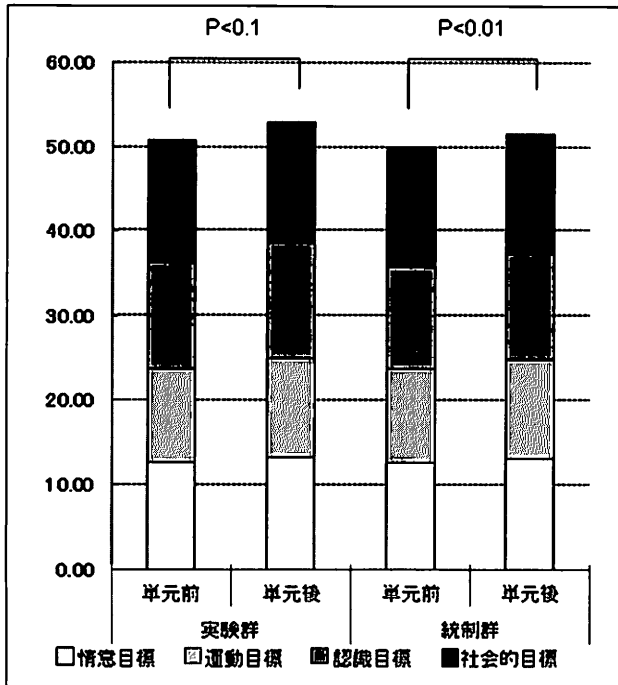


図1 授業評価(全体)の事前・事後比較

表4 各授業評価目標の得点

	実験群		統制群	
	事前	事後	事前	事後
情意目標	12.60	13.24	12.73	13.15 *
運動目標	11.20	11.76	11.00	11.73 *
認識目標	12.44	13.56	12.04	12.56 *
社会的目標	14.56	14.40	14.31	14.21 *
総合	50.80	52.96 △	50.08	51.65 *

N=25

N=218

事前、事後比較\* : p<0.01

△ : p<0.1

(2) 運動目標

運動目標の事前・事後比較を図3に示している。実験群はプラス評価と0評価が増加し、マイナス評価が減少した。統制群は、プラス評価が増加し、0評価とマイナス評価が減少した。

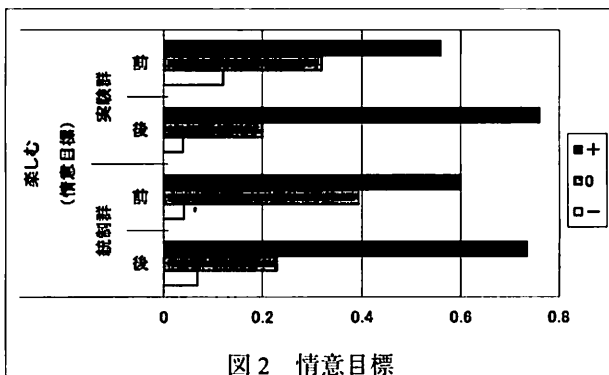


図2 情意目標

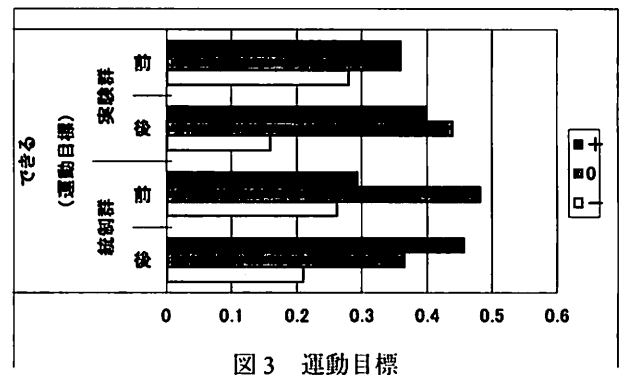


図3 運動目標

(3) 認識目標

認識目標の事前・事後比較を図4に示している。実験群は、プラス評価が増加し、マイナス評価はかなり減少し、マイナス評価をしたものは誰もいなかった。

統制群は、プラス評価が若干の増加を示し、0評価とマイナス評価はわずかな減少であった。

認識目標に関して、実験群の方がかなり高い評価を受けたことになる。

(4) 社会的目標

社会的目標の事前・事後比較を図5に示している。社会的評価に関しては、実験群、統制群ともに事前においてかなり高いプラス評価があった。実験群は0評価が若干増加した。統制群においては、マイナス評価が若干増加した。

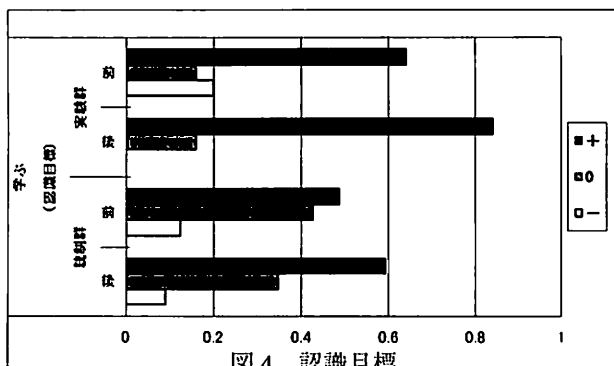


図4 認識目標

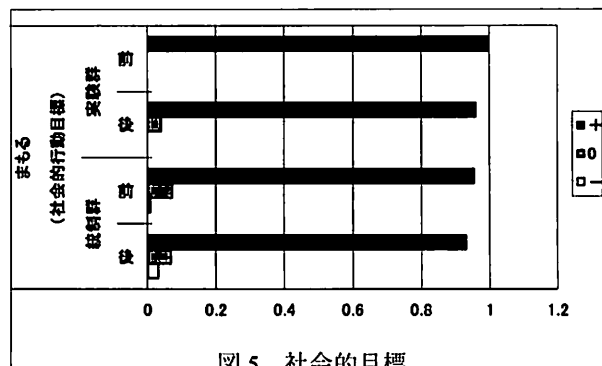


図5 社会的目標

2. 技術・戦術に関わる技能の変化

サッカー (フットサル) とフラッグフットボールの技術・戦術に関わる技能の変化を各々図6と図7に示している。図中には「やや身に付いている」以上の技能習得の変化がわかるように矢印を記入している。

技術・戦術に関わる技能として両教材ともパス技能, 2人によるコンビネーション攻撃の技能, 2人によるコンビネーション防御の技能, 3人によるフォーメーション攻撃の技能, 3人によるフォーメーション防御の技能について自己評価が課せられた。

サッカー (フットサル) における技能において「身に付いている」と答えた者は, パス技能で事前の約30%に対して事後は約80% (約50%増), 2人によるコンビネーション攻撃の技能で事前の約20%に対して事後は約60% (約40%増), 2人によるコンビネーション防御の技能で事前の約10%に対して事後は約70% (約60%増), 3人によるフォーメーション攻撃の技能で事前の約10%に対して事後は約70% (約60%増), 3人によるフォーメーション防御の技能で事前の約15%に対して事後は約90% (約75%増) とどの技能においてもかなりの伸びを示しており, 有意な差が認められた。特に難しいと思われている3人以上のフォーメーション防御に関して急激な伸びを示した。

フラッグフットボールにおける技能において「身に付いている」と答えた者は, パス技能で事前の約25%に対して事後は約80% (約55%増), 2人によるコンビネーション攻撃の技能で事前の約20%に対して事後は約60% (約40%増), 2人によるコンビネーション防御の技能で事前の約5%に対して事後は約70% (約65%増), 3人によるフォーメーション攻撃の技能で事前の約10%に対して事後は約65% (約55%増), 3人によるフォーメーション防御の技能で事前の約15%に対して事後は約85% (約70%増) とどの技能においてもかなりの伸びを示しており, 有意な差が認められた。サッカーと同様に特に難しいと思われている3人以上のフォーメーション防御に関して急激な伸びを示した。

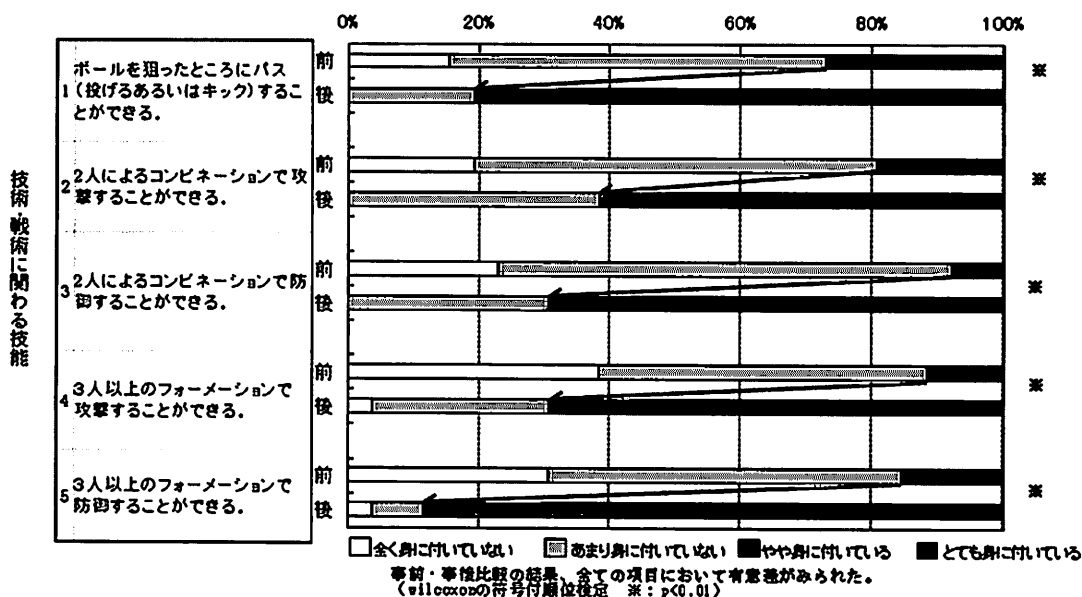


図6 サッカーの技術・戦術に関わる技能の変化

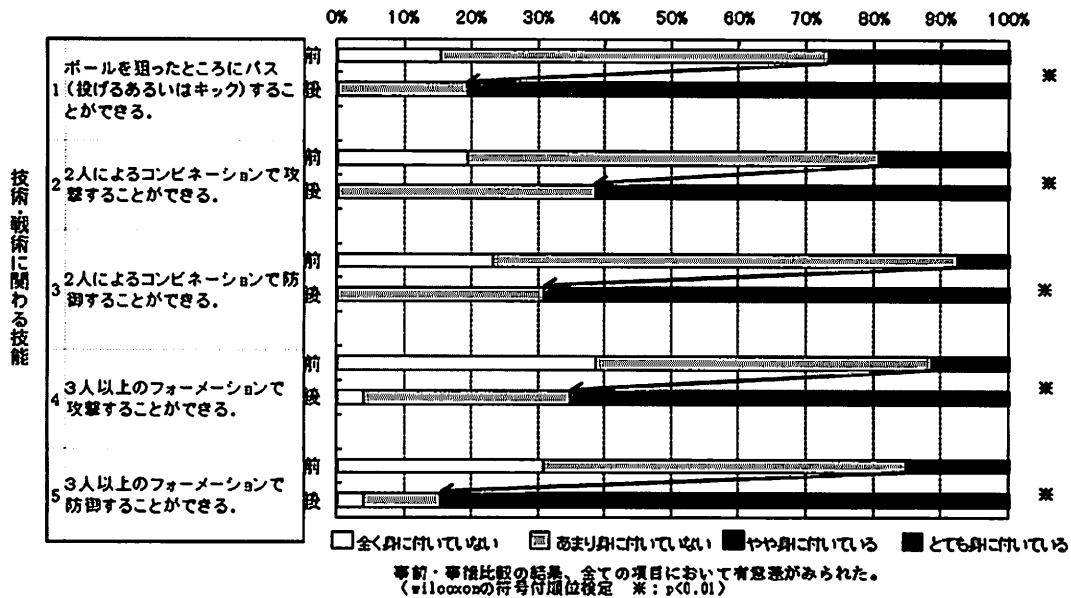


図7 フラッグフットボールの技術・戦術に関わる技能の変化

3. スポーツ実践を支える構成要素に関わる知識・技能の変化

スポーツ実践を支える構成要素に関わる知識・技能の変化を図8に示している。図中には「やや身に付いている」以上の技能習得の変化がわかるように矢印を記入している。

構成要素は大まかに技術・戦術要素、組織・運営要素、その他要素に分類した。技術・戦術領域の構成要素は基本技術の名称、攻防の展開の仕方、状況判断、連携した攻撃、および守備などである。組織・運営領域の構成要素は大会の企画・運営、ルールおよび審判法、ゲーム運営などである。その他領域の構成要素は体力向上法、技能の上達過程、歴史の変遷、心理的スキル、実践するための環境や条件整備などである(詳細は前出の表3)。

構成要素に関わる知識・技能に関して事前調査を見ると全体として統制群の方が高い値を示しており、実験群の学生は一般より知識・技能が低い学生(対象)だったといえる。

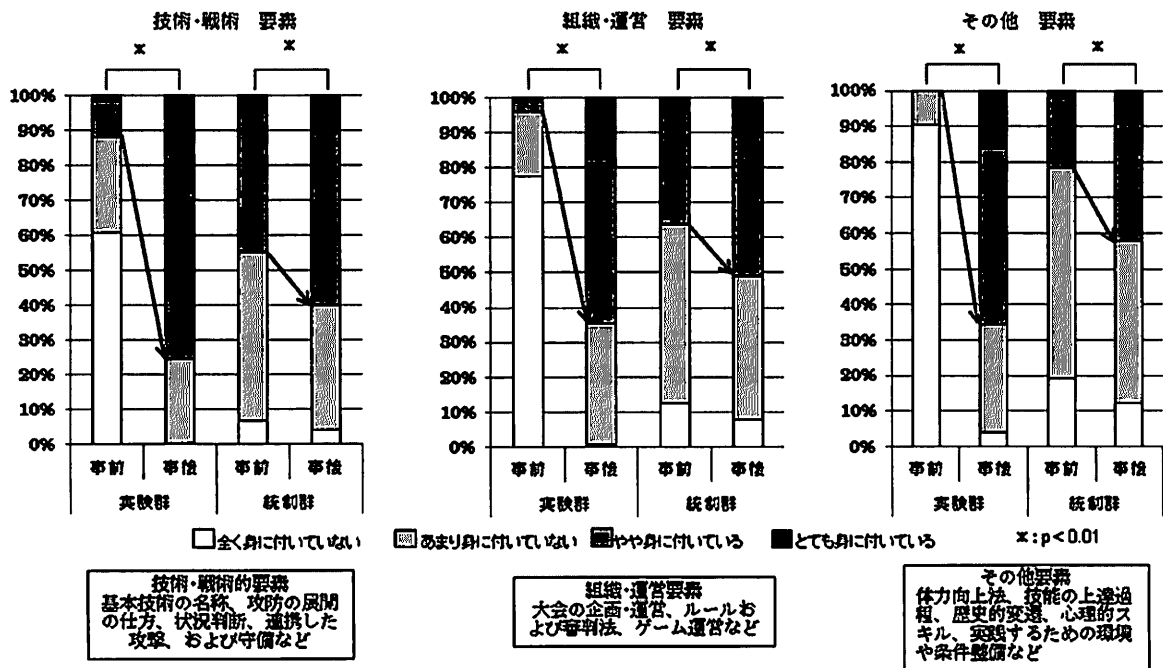


図8 スポーツ実践を支える構成要素に関わる知識・技能

技術・戦術要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では事前の約 10%に対して事後で約 75% (約 65%増) とかなり伸びを示し, 統制群では事前の約 45%に対して事後で約 60% (約 15%増) であった。

組織・運営要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では事前の約 5%に対して事後で約 65% (約 60%増) とかなり伸びを示し, 統制群では事前の約 35%に対して事後で約 50% (約 15%増) であった。

その他要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では事前の約 0%に対して事後で約 65% (約 65%増) とかなり伸びを示し, 統制群では事前の約 20%に対して事後で約 40% (約 20%増) であった。

どの構成要素に関しても実験群, 統制群ともに事前・事後間に有意な差が認められた。

#### 4. 教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容の変化

今回の実験的授業の中核となる教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容, つまり「フットボールの文化論」に関わる変化を図9 (サッカー) と図10 (フラッグフットボール) に示している。フットボールの文化論に関わる内容は, 近代スポーツの誕生過程, スポーツの伝播・普及過程, ルール変更と精神, 戦術史とルール史, 文化的価値と教育的価値の5領域で構成されている。

##### 1) サッカーに関して

近代スポーツの誕生過程に関して「身に付いている」と答えた者は, 事前の約 25%に対して事後で約 95% (約 70%増) とかなり伸びを示し, 有意な差が認められた。スポーツの伝播・普及過程に関して「身に付いている」と答えた者は, 事前の約 5%に対して事後で約 90% (約 85%増) とかなり伸びを示し, 有意な差が認められた。ルール変更と精神に関して「身に付いている」と答えた者は, 事前の0%に対して事後で約 85% (約 85%増) とかなり伸びを示し, 有意な差が認められた。戦術史とルール史に関して「身に付いている」と答えた者は, 事前の0%に対して事後で約 90% (約 90%増) とかなり伸びを示し, 有意な差が認められた。文化的価値と教育的価値に関して「身に付いている」と答えた者は, 事前の10%に対して事後で約 80% (約 70%増) とかなり伸びを示し, 有意な差が認められた。



□ 全く身に付いてない    ◻ あまり身に付いてない    ■ やや身に付いている    ■ とても身に付いている

事前・事後比較の結果, 全ての項目において有意差がみられた。  
(Wilcoxonの符号付順位検定。\*: p<0.01)

図9 教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容 (サッカー)

2) フラッグフットボールに関して

近代スポーツの誕生過程に関して「身に付いている」と答えた者は、事前の0%に対して事後で約65%（約65%増）とかなり伸びを示し、有意な差が認められた。スポーツの伝播・普及過程に関して「身に付いている」と答えた者は、事前の約5%に対して事後で約70%（約65%増）とかなり伸びを示し、有意な差が認められた。ルール変更と精神に関して「身に付いている」と答えた者は、事前の5%に対して事後で約70%（約65%増）とかなり伸びを示し、有意な差が認められた。戦術史とルール史に関して「身に付いている」と答えた者は、事前の0%に対して事後で約75%（約75%増）とかなり伸びを示し、有意な差が認められた。文化的価値と教育的価値に関して「身に付いている」と答えた者は、事前の0%に対して事後で約70%（約65%増）とかなり伸びを示し、有意な差が認められた。

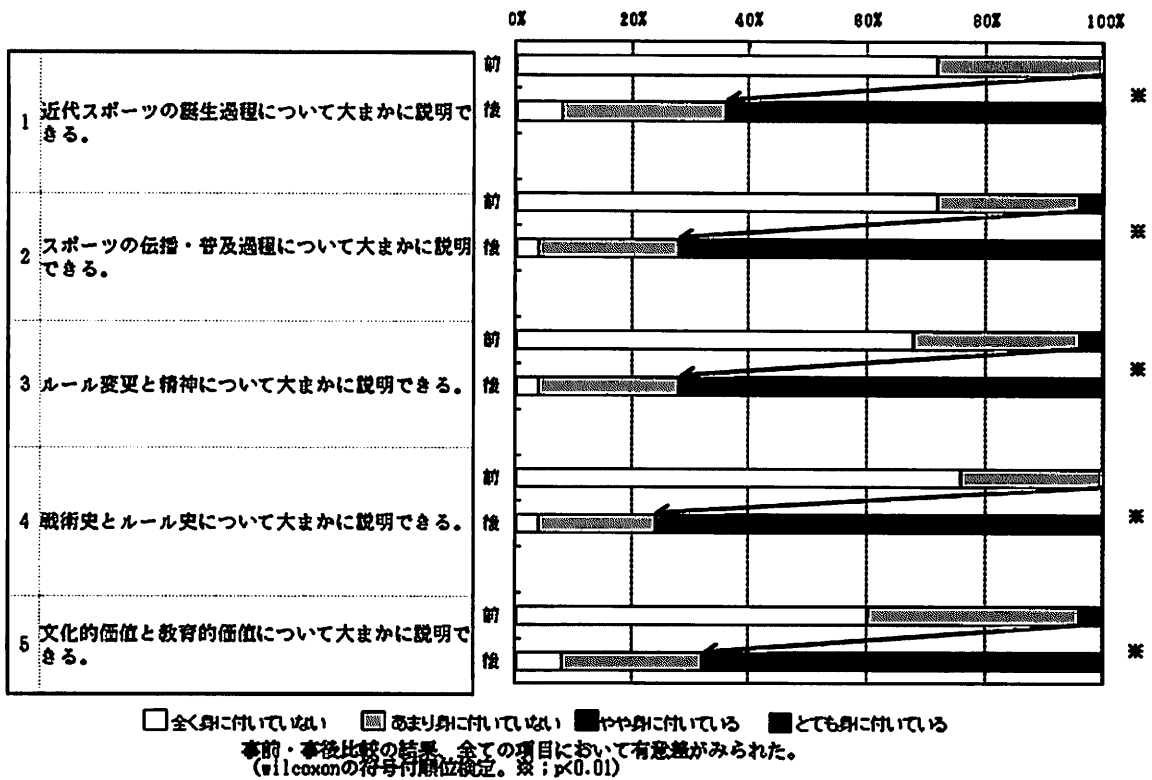


図 10 教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容（フラッグフットボール）

IV 考 察

1. 授業としての成立について

授業とは人間形成を目的とし各教科等の教授・学習過程全体ということができる。教科内容と媒体となる教材との関係にはさまざまな解釈があるが、「教材とは教科内容を教えるために選択された具体的な素材あるいは教育的に再組織されたもの」という解釈が一般的である。さらに、吉本ら（1981）によれば、教科の基盤となる学問的知識の体系に依拠した教科内容の系統化が重要とされている。

体育授業とは、体育・スポーツ科学の成果を体系化し精選した教科内容を教材と通して系統的に教授・学習される過程と考えることができる。しかし、体育科においては内海（1997）が分析しているように1958年改訂「学習指導要領」から現在までスポーツ・運動種目をいくつかの領域に分類し、その領域（教材）そのものを学習するというように教科内容と教材が混同して扱われてきた。いわゆる「運動目的論」ともいえる。他教科は一般的に教科内容を教えるために教材を選択するといった、いわゆる「手段論」といえる。

さらには最近の学士課程教育問題として「学士力」の構成要素としての能力、たとえば、全国大学体育連合



ほか(2010)が心身の健康や社会的スキルなどが体育で獲得できると主張している。新たな意味での「手段論」も出現してきている。

本研究では様々な教科内容を持つと考えられる複数の大学を統制群とし、教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容を教科内容としたものを実験群として比較・分析した。

分析には高橋ら(2003)が開発した授業評価尺度をそのまま使用した。結果は、実験群、統制群ともに事前に比べてわずかではあるが伸びを示し、統計的にも有意な差があった。全体として実験群、統制群とも約80%の高得点という同様の結果および傾向を示した。分析に用いた評価尺度は情意、運動、認識、社会の目標領域で構成されており、体育授業の目標を網羅したものといえるし、すでに確立した授業評価尺度である。

これらのことから、実験群は教養に融合させたスポーツ科学の専門的内容を中核的な教科内容として構成したため専門的で学習困難とも予想されたが体育授業として成立したことがいえる。さらに、一般的な授業の統制群と同様の結果であり、かつ高得点であったことから授業として成立するだけでなく、かなり高レベルの授業であったことがいえる。

## 2. 教材の技能および種々のスポーツ構成要素の習得について

本実験的授業の中核となる教科内容は「文化論」であり、しかも教材としてのフットボールに関わらせながら学んでいくものであった。文化論は体育・スポーツ科学の構成要素ではあるが完全に網羅されているものではないので、他の要素がどの程度影響していたかの検討の余地もある。さらに、教材の技術・戦術等に直接的に実践的に関わるものではなく、技能の向上との関連も検討しておかなければならない。

教材の技能に関してサッカー(フットサル)とフラッグフットボールの両教材ともパス技能、2人によるコンビネーション攻撃の技能、2人によるコンビネーション防御の技能、3人によるフォーメーション攻撃の技能、3人によるフォーメーション防御の技能の5つを分析した。

サッカー(フットサル)において「身に付いている」と答えた者は、パス技能で約80%、2人によるコンビネーション攻撃の技能で約60%、2人によるコンビネーション防御の技能で約70%、3人によるフォーメーション攻撃の技能で約70%、3人によるフォーメーション防御の技能で約90%とどの技能においてもかなりの伸びを示しており、事前・事後間に有意な差が認められた。全体の平均は74%であった。

フラッグフットボールにおいて「身に付いている」と答えた者は、パス技能で約80%、2人によるコンビネーション攻撃の技能で約60%、2人によるコンビネーション防御の技能で約70%、3人によるフォーメーション攻撃の技能で約65%、3人によるフォーメーション防御の技能で約85%とどの技能においてもかなりの伸びを示しており、事前・事後間に有意な差が認められた。全体の平均は72%であった。

防御技能がかなり高まっているのは、最初に防御戦術の指導がまず行われ、その動き方等がわかっていたためだと考えられる。攻撃技能は防御の長所・短所を理解したうえで、攻撃を学習していることが大きい。フラッグフットボールではライス(楕円球)型ボールではなく小学生でも扱えるサイズの球形のドッジボールを使用したため容易にパスを成功させることができたことが最も大きな要因であると考えられる。サッカーのパス技能の向上は、体育館内のバスケットボールコートを使用して行ったフットサル(5人対5人<うち1人はゴールキーパー>)のため、女子でも容易にパスが可能であったことが考えられる。

これらの高い結果(フットボール全体平均73%)は、大学体育(15回授業)において十分な達成度だと考えられる。大学体育研究で技能の変化等を報告した研究が少ないうえに、教材や教科内容が異なる研究とは直接比較・分析することは難しい。同様の大学体育研究で生涯スポーツが中核的な教科内容として組み込み試みられた水月ら(2009)の授業成果も技能向上がみられており、一致する点も多い。

スポーツ構成要素としての技術・戦術要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では約75%とかなり伸びを示し、統制群では約60%であった。組織・運営要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では約65%とかなり伸びを示し、統制群では約50%であった。その他要素に関して「身に付いている」と答えた者は実験群では65%とかなり伸びを示し、統制群では約40%であった。全要素を平均すると実験群約68%、統制群約50%となる。どの構成要素に関しても実験群、統制群ともに事前・事後間に有意な差が認められた。

大学入学時におけるスポーツ構成要素関連の知識・実践力に関してより多くの項目(73項目)について調査している則元ら(2009)の報告によると、入学時の知識・実践力は約20~30%となっており、両群とも向上していることがわかる。特に実験群は約10%と一般よりはるかに低いレベルから約68%へとかなりの成果が見られた。

これらの成果は、フットボールの文化論に関わって学んだ近代スポーツの誕生過程、スポーツの伝播・普及過程、ルール変更と精神、戦術史とルール史、文化的価値と教育的価値などが組織・運営やその他の構成要素に影響した可能性が考えられる。

### 3. 「専門教養」としての大学体育

今回の研究では、学士課程教育における大学体育を検討することを構想し、その一部を実験的授業により検証することが目的であった。ここでは最近の大学体育の論議を踏まえながら、結果を考察していくことにする。

大学教育が大衆化してきたことにより入学時の低学力化が生じている（石井ほか、2005；石井ほか、2007；私立大学情報教育協会、2008）。このような高校までの低学力化は、森（1999）や丸山（2002）が指摘するように大学体育にも影響を及ぼしている。ほとんどの大学において一般教養（共通教養）としての体育は初年次に配当されている。初年次教育は学部教育を前提とした初年次と大学教育全体として初年次の検討に分類できるが、大学体育を大学教育全体として初年次における教養（共通）教育としてみた場合、低学力化は大学全体としての初年次教育問題に関わるものである。

文部科学省（2008）の報告によれば、全国の約71%の大学において初年次教育が導入され、全国的に重要な問題として検討され始めている。

則元ら（2009）も高校までに学ぶべき体育の内容の20～30%程度しか新生は習得していないと報告しているが、このことは初年次教育の一つでもある補習教育にかなり関わる検討課題でもある。大学入学時の体育的学力が20～30%であれば、高校の延長として系統的に学ぶことは不可能に近い。理数系学生などに関わる補習教育は小学校から高校まで教科内容が体系化され、系統的な学習体制が構築されているため、どのような教科内容を補修するのかが特定しやすい。しかし、体育科の場合は体系化された教科書もなく、学習指導要領に大まかに内容が示されているだけで補習内容を特定しにくい。しかし、入学時において体育的学力の低下がみられる以上、低学力対策の一つとして補習教育は重要な課題である。

日本学術会議（2010）は学士課程教育に関わって図11のように大学教育の全体像を示している。そこでは一般教育（共通基礎教養）の重要性が主張され、具体的には人文社会系学生に科学的リテラシー、人文系・理系学生に社会科学リテラシー、理系・社会科学系学生に人文科学的リテラシーなどが提案されている。

一般教育（共通教養）としての大学体育の授業研究を大まかに分類すると体力の維持・向上、心身の健康、社会的スキルなどが行われている。

体力の維持・向上に関する研究として松岡・徳山（1996）、内田・神林（2006）、角南ら（2008）、林ら（2009）、藤澤義彦（2006）などがあり、最近の青少年の体力低下に対して週1回の授業でも効果があると報告されている。

心身の健康に関する研究として橋本ら（2000）、堀尾ら（2003）、新井野ら（2005）、磯貝（2008）、橋本ら（2008）などがあり、ストレス解消効果、抗うつ効果、ポジティブ感情増加、不安低減効果などの効果があったと報告されている。

社会的スキルに関する研究として一宮ら（2003）は他者との関係性を保つ上において重要なコミュニケーションスキルの低い学生が増えていると報告し、大学の体育授業において杉山佳生（2008）、西田・橋本（2009）は感情表出スキルや共感・援助スキルが向上したと報告している。

しかし、高校までに修得した体育的学力をより深化させる授業研究はほとんどない。

本研究は日本学術会議が示す図11の専門教養に関わる研究であった。専門教養の一般的解釈は専門教育に関わる専門的な教養を意味することが多く、一般教育（共通教養）とは必ずしも融合されているものではない。本研究は、この曖昧な専門教養を検討する初期的な研究課題として体育・スポーツ科学の成果（専門的内容）を従来の教養と融合させることを試みた実験的授業である。

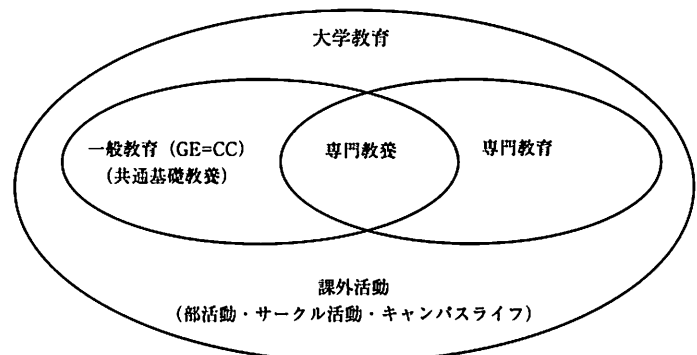


図11 日本学術会議（2010）「21世紀の教養と教養教育」p20

体育・スポーツ科学の成果（専門的内容）としてのフットボールの文化論（近代スポーツの誕生過程，スポーツの伝播・普及過程，ルール変更と精神，戦術史とルール史，文化的価値と教育的価値の5領域）に関わる学習成果としての知識・能力は全体を平均して約80%の習得率を示し，平均伸び率は約73%であった。しかも，教材に関わる技能およびスポーツ構成要素に関わる知識・能力を一般的授業と比較しても優位に高い値を示した。

前述の大学体育に関する体力の維持・向上，心身の健康，社会的スキルなどの研究と同様の1年次生対象で授業期間もほとんど同じではあるが，授業目標や授業内容が異なるため直接比較することはできない。どの研究も事前・事後比較において有意な差が認められている。それらに加えて，本研究は一般的授業と比較しているのでより確実な成果として認めることができるといい。

## V 結 論

本研究の目的は，体育・スポーツ科学の成果つまり専門分野の内容と教養教育を融合させた授業内容を設定し，実験的授業を実施し，一般的授業と比較・検証するものであった。実験的授業の具体的な中核的内容はフットボールの文化論（近代スポーツの誕生過程，スポーツの伝播・普及過程，ルール変更と精神，戦術史とルール史，文化的価値と教育的価値の5領域）であった。その結果，以下の知見が得られた。

1. 専門分野の内容と教養教育を融合させた授業（中核的内容はフットボールの文化論：近代スポーツの誕生過程，スポーツの伝播・普及過程，ルール変更と精神，戦術史とルール史，文化的価値と教育的価値の5領域）に対応した知識・能力は全体を平均して約80%の習得率を示し，平均伸び率は約73%であり，有意な差が認められた。
2. 教材（サッカーとフラッグフットボール）の技能は全体を平均して約74%の習得率を示し，平均伸び率は約72%であり，有意な差が認められた。
3. 種々のスポーツ構成要素の習得について全要素を平均すると実験群約68%，統制群約50%であった。どの構成要素に関しても実験群，統制群ともに事前・事後間に有意な差が認められた。
4. 総合的授業評価の結果は，実験群，統制群ともに事前に比べてわずかではあるが伸びを示した。統計的には有意な差があった。全体として実験群，統制群とも同様の結果および傾向を示した。これらから，両群とも授業として成立した。

以上のことから，専門分野の内容と教養教育を融合させた授業（中核的内容はフットボールの文化論：近代スポーツの誕生過程，スポーツの伝播・普及過程，ルール変更と精神，戦術史とルール史，文化的価値と教育的価値の5領域）は，専門教養に関わる授業内容としての可能性が示唆された。

## 文 献

- 新井野洋一・岡本浄実・佐多直温（2005）新入生に対する健康調査結果の17年間の変化～男女差を中心に～. 愛知大学体育学論叢, 13: 13-41.
- 中央教育審議会（2008）学士課程教育の構築に向けて. 各専攻分野を通じて培う学士力～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～. 中央教育審議会答申.
- 藤澤義彦（2006）大学における保健体育教育とは. 大学時報, 55 (307): 88-93.
- 橋本公雄・渡壁史子・西田順一（2000）運動に伴う一過性のポジティブな感情の増加とメンタルヘルスの改善・向上との関係. 体育・スポーツ教育研究, 1: 5-12.
- 橋本公雄代表（2008）大学生の心身の健康問題に対処しうる独創的体育プログラム開発. 平成18・19年度科学研究補助金基盤研究(B).
- 林直亨・宮本忠吉（2009）週1回の大学授業における筋力トレーニングが筋力に与える影響. 体育学研究, 54: 137-143.
- 堀尾敏幸・清田安喜・藤本忠範・木原雄治・加藤健一・出田晋（2003）大学新入生の保健知識の実態に関する一考察. 崇城大学研究報告, 28 (1): 49-60.
- 一宮厚・馬場園明・福盛英明・峰松修（2003）大学新入生の精神状態の変化～最近14年間の質問票による調査～. 精神医学, 45 (9): 959-963.

- 石井秀宗・椎名久美子・前田忠彦・柳井晴夫（2007）大学教員における学生の学力低下意識に影響する諸要因についての検討．行動計量学，34（1）：67-77.
- 石井秀宗・柳井晴夫・椎名久美子・前田忠彦・鈴木規夫・荒井克弘・大竹洋平（2005）大学生の学習意欲と学力低下に関する教員の意識についての調査研究．大学入試センター研究紀要，34：19-58.
- 磯貝浩久（2005）スキー実習が自己効力感に及ぼす影響．大学体育学，2：25-36.
- 松岡信之・徳山郁夫（1996）大学における保健体育科目—教養科目としての位置づけ—．一般教育学会誌，18（2）：96-99.
- 丸山真司（2002）高校体育のカリキュラムづくりの課題．体育科教育，50（1）：42-45.
- 文部科学省高等教育局大学振興課（2008）大学における教育内容の改革状況について．文部科学省報道発表（平成20年6月3日）：6-7.
- 森敏生（1999）新学習指導要領下における体育の学力と大学体育の課題．大学体育，70：25-30.
- 西田順一・橋本公雄（2009）初年次学生の対人コミュニケーションスキル改善を意図した生涯スポーツ教育プログラムの心理社会的有効性．大学体育学，6：91-99.
- 則元志郎・西田明史・水月晃・柿原一貴・笠井妙美・田中靖久（2009）大学体育における知識・能力の形成—大学入学時における保健体育教科の知識・実践力の実態と大学体育の課題—．熊本大学教育学部紀要（人文科学），58：21-30.
- 私立大学情報教育協会（2008）授業で直面している問題点．平成19年度私立大学教員の授業改善白書：1-6.
- 杉山佳生（2008）スポーツ実践授業におけるコミュニケーション向上の可能性．大学体育学，5：3-11.
- 水月晃・笠井妙美・西田明史・柿原一貴・則元志郎（2009）大学体育における知識・能力の形成—生涯スポーツ実践に向けた実験的授業—．熊本大学教育学部紀要（人文科学），58：31-40.
- 角南良幸・村上清英・大隈節子・中山正剛（2008）体育実技における準備運動の活用がSAQ関連体力に及ぼす影響について．体育・スポーツ教育研究，9（1）：5-13.
- 高橋健夫（2008）教育改革でこれまでの体育はこう変わらねばならない．体育科教育，56（5）：14-18.
- 高橋健夫編著（2003）体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—．明和出版：161-162.
- 内田英二・神林勲（2006）週1回8週間のサーキットトレーニングが大学生の体力および感情に与える影響．体育学研究，51：11-20.
- 内海和雄（1997）体育授業の目標．宇土正彦他編，学校体育授業事典，大修館書店：100-112.
- 吉本均編（1981）教授学重要用語300の基礎知識．明治図書：155.
- 全国大学体育連合・日本体育学会・日本女子体育連盟・日本体力医学会・全国体育系大学学長・学部長会・日本教育大学協会保健体育・保健研究部門（2010）体育系学術団体からの提言2010—21世紀の高等教育と保健体育—．大学体育問題連絡会アピール文書作成委員会編.